

植物相の著しく違つた代表的な採集地、三濃山は、雨にふられた時間の関係で割愛して帰路につく。この頃からは日が照り出す。そよ風に白い葉裏を見せるアベマキが目立つ。神戸地方と違つてクヌギの方が珍らしいという。

春名氏から神戸生物クラブ採集会の予定やサイカチ豆の話があり、その他会員の方々から各支部の事業計画やら、種々のお話が出て絶えず車内を賑わす。大久保附近の池づつみでルリヤナギの採集をする。毒らしくない毒草だが菜食すれば中毒する。セイタカアキノキリンソウも群つて咲いていた。

明石の街路樹にはエンジュもある。舞子辺の東南向の庭園に雄大なワシントンアが見えた。芦屋辺までは生育するという。

須磨では海寄りにオオマツヨイグサの群落があつて夕方だというのに昨日の花がまだ残つてあたりを黄色一色にぬりつぶしていた。

バスは会員の要求に応じて、次々に停車しては人々を降ろし各人は今日一日の楽しい貴い採集品をみやげに惜しい別れを告げて予定より少し早く明るい中に解散したのであつた。

丹波支部生物採集記

樋口 繁 一

昭和31年9月2日氷上郡氷上町で本会会長森為三博士を講師にお願いして、生物採集会を開催しました。参加者は農大浜田教授、野草助教授、堀江助教授、柏原高校の松山、井上、山本、大西教諭、氷上中学の開田教諭を始め、多紀郡、氷上郡の高校、中学の教員及び生徒等約45名で盛大な採集会を開くことが出来ました。

先ず成松町の葛野川（加古川の上流）でバイカモ（毛茛科）の採集。この川底、流水の中一面にバイカモが繁殖して緑色になつている。白い花をつけたのもあり、其他ミズガラシ等も混生している。この植物は寒地にあり、多紀郡では大山村1か所です。次に成松町の西端、とげ魚科のミナミトミヨの絶滅地の見学に行きました。

この地は佐治川の冷水が堤を通して湧出して清水が常に多量溝に満ち流れて池に充ちていた。ここに珍魚ミナミトミヨが昭和5年頃まで棲息していたところです。当地方ではカツオと呼んでいたが背に9本の刺を有し、水草で巣を造つて産卵し、雄はその巣の周囲を廻つて警戒する珍らしい習性がありました。

森先生の説明によると、

ミナミトミヨは日本海に注ぐ河川に棲む魚であるのに、加古川の上流にいたことは以前この土地が日本海に注ぐ由良川の上流と関連があつた証拠である。若し棲息して居れば天然記念物に指定する価値がある。今は絶滅して残念であるが、せめても柏原高校の標本を回覧する。学名 *Pygosteus kaibarae* TANAKA の

種名 *kaibarae* は、田中茂穂博士の記念名で、棲息地が我国の最南端であるので、和名もミナミトミヨとされたのである。今も由良川の上流京都府下には、ミナミトミヨの棲息地がある。

ここから葛野の達身寺まで動、植物、昆虫を採集しつつ行く。この土地は早春の植物が豊富なところで山すその竹藪や草の中に

カタクリ、イチリンソウ、ニリンソウ、アズマイチガ、ユキワリイチガ、キクザキイチリンソウ、マルバコンロンソウ等が、色とりどりに咲き乱れるところである。

達身寺より奥の溪流は、丹波、但馬、播磨の三国の境するところで7~800m 近くの山の溪谷でヒラベ（アマゴ）が棲息しているのでこの採集に向いやつと数匹を採ることが出来た。

森先生の説明によると

ヒラベはマスの陸封されたもので、太平洋の河川のもの日本海の河川のものとの2型がある。前者がアマゴで後者がヤマメである。両者を比較すると体側に朱の斑点があるので区別することが出来る。即ち斑点の有るのがアマゴで、無いのがヤマメである。この地のヒラベは朱点が少なく、加古川の上流であるのに由良川との関連がある。

隣の多紀郡後川にアマゴが棲息しているが、これは武庫川の上流で、朱点が多く明瞭にアマゴ型である